

半村良



講談社

著者紹介

昭和8年10月27日、東京に生まれる。都立両国高校卒。

紙問屋の店員を皮切りに、プラスチック成型工、バーテンダー、板前見習、コック見習、喫茶店、バーの経営、クラブ支配人、連れ込みホテルの番頭、肉の仕入れ、ビリヤードの支配人等多彩な職業を経験。

昭和37年、「SFマガジン」のコンテストに応募して小松左京氏とともに入選（作品「収穫」）。広告業界に転じて加賀まりこや円鏡らのディスク・ジョッキーのコント・構成・演出を担当。

昭和48年「産霊山秘録」で第1回泉鏡花賞、昭和50年「雨やどり」で第72回直木賞受賞。

主要著書「妖星伝」（鬼道の巻・外道の巻）「石の血脈」「産霊山秘録」「黄金伝説」「英雄伝説」「不可触領域」「平家伝説」「闇の中の系図」「楽園伝説」「死神伝説」

現住所 東京都世田谷区若林3-25-15

魔女街

第1刷 昭和51年3月28日

著者 半村 良（はんむら・りょう）

発行所 株式会社 講談社・発行者 野間省一

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111（大代表）・振替 東京3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

© 1976 RYO HANMURA Printed in Japan

口絵写真・著者、撮影・本社写真部 副島泰

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

定価はカバーに表示してあります

（文2）

目次

魔女街	5
魔王街	63
幻町の女	153
最初の夢	175
窓辺の円盤	211
中年天使	239

装幀 井上正篤

魔
女
街



一日中あたりの空気を激しく震わせていた帶鋸おびのこの甲高い音が急にやんだ。
「だから……」

工場を背にして帶鋸の音に負けまいと大声を出していた貧相な四十男が、そう言いかけて喋るのをやめ、うしろを振り返ってから普通の声になって言った。

「だから組合なんてくだらねえって言うんだよ」

純康平は頷うなずいて見せ、

「俺はどうでもいいんだ。本当は組合なんか関係ないよ。でも、みんな今度のことで熱くなってるし、俺だけ知らん顔をしているわけには行かないもの。それに、給料があがるのは悪いことじゃないし」と言って歩きだした。あちこちに木材が積んであって、地面は長年の間に積もった大鋸屑おがくずでふかふかしている。おまけにこのあたりは低地だから湿気が抜けることがなく、歩くたび濡れ雑巾ぞうきんを踏みつけたような音がするのだ。

「よせよ。俺はお前の為ためを思って言っているんだぞ。班長や係長まではまあいいや。でも、課長から上はみんなあっち側だぜ」

男は康平と並んで歩きながら、工場の先にある二階建ての建物を顎の先で示した。この木工場は柄にもなくだだっぴろい敷地を持っている。その気になって木材の山を二つか三つ別な場所へ移せば、工場のすぐ横に野球のグラウンドぐらい簡単に作れてしまう。もっとも、それは草野球には充分な広さの、という意味だし、大鋸屑でふかふかになった地面の上ではボールも思うようには弾まないだろう。

「睨まれちゃ損だぞ。組合なんか適当につき合いでやってればいいんだ。何たって金を持ってるのはあっちだからな」

男はまた二階建てのほうを顎でしゃくった。そこが事務所なのだ。

「でも、みんながおこるのも無理はないよ」

康平は木のサンダルで大鋸屑を蹴った。この工場ではみんな言い合わせたように木のサンダルを履いていた。作業台のあたりに積もった大鋸屑の中に、よく刃物がかくれていることがあるのだ。だから木のサンダルがいちばん安全なのだ。それに、靴など履いていたら、すぐ大鋸屑が入って始末が悪い。木の香に混ってどこからか強いフォルマリンの匂いが漂って来る。

「夏のポーナスのとき、一カ月なんてとても出せないって突っぱねたくせに、あんな凄（う）い家を建てるんだものな」

高須木工所の社長、高須久市の家はこの工場のすぐそばに建っている。北側の低い塀の外がすぐに社長の家の庭になっているのだ。地続きである。かなり古めかしい家だったが、最近急にそれを改築しはじめた。今度の家は以前の倍ぐらいの建坪があり、盛大な上棟式がおわると、艶々と黒光りした、いかにも高価そうな瓦が乗りはじめた。

工員たちの中には、満足な家に住んでいる者は一人もいなかった。公団アパートに住んでいる者は

みんなから羨まし^{うらや}しがられていた。十何年勤続している男が、いまだに工場の近くの、二間^{ふたま}の木造アパートなのである。

この夏のボーナスをいつもの半分くらいにおさえられたあとだけに、日ごとに完成に近づいて行く社長の家を見て、忿懣^{ふんげん}のないわけがなかった。

「舐^なめてやがるんだ」

みんなそう言つて腹を立てていた。それまで組合もなかったが、金町の駅の近くに毎年一年の半分くらい赤旗を立て放しにして経営者と揉^もめている組合があるので、気のきいた奴がそこへ相談に出かけたのだ。そうしたらなんと、社会党だか共産党だかが力こぶをいれて、組合結成に至れり尽せりのお膳立てをしてくれたというわけなのだ。

「組合つて、こんなに簡単に作れちゃうのかい」

工員たちはその手軽さにびっくりしたが、社長のほうはうすら笑いをして、「木を切つたり削つたりしなくてもうちらはちゃんとやつて行けるんだ」

とうそぶいたと言う。つまり、木工部門を切り捨ててしまつてもかまわないのだぞというわけである。木材は高騰しているし、社長は昔から原木の売買をやつて来ていた。多分社長に見れば、木工部門は足手まといというわけなのだろう。その証拠に、以前から工場を勤めあげて事務所へ移った連中は、例外なく営業部員にされている。木工の現場を監督する役につくのは、どれもこれももうだつたあがらない、もうこれで行きどまりときまつたような男ばかりであった。

康平に組合活動に加わらないよういさめていた四十男は、その現場の監督の役に、もう少しで手の届く位置にいた。彼にしてみればそれでも栄光の椅子というところなのだろう。だからこの際若手に派手な暴れ方をされては、元も子もないと思つていろいろらしい。

「俺はどうでもいいんだ」

事務所の横にある汚い小屋のような建物に入るとき、康平は結論を出すようにそう言った。食堂兼休憩室兼更衣室である。誰かが怪我をすれば医務室にもなる。壁の中側に正方形の桧^{ます}が作ってあった。銭湯にある脱衣棚そっくりである。ただし鍵のついた扉はなく、むき出しだった。工員たちは朝そこへ着て来た衣服をいれて作業服に着がえ、夕方はその棚から自分の服を出して着て帰るのである。

紺屋の白袴で、塗りものはげガタガタになった木の長いテーブルが板の間に置いてある。テーブルの上には昼飯のとき使った大きなアルマイトの薬罐^{やかん}がふたつ出しつ放しになっていて、ブリキの平べったい灰皿が散らばっていた。

隅のほうに競馬好きがひとかたまり、作業服のままで週末の馬券作戦に余念がない。と言っても、大した金をつぎこめるわけもなく、楽しみは馬券そのものより、あれこれ予想をたて合う次の週末までの時間なのだ。そして、その飯場然とした建物の窓の下では、月賦で買った250CCの単車をピカピカに磨きあげている青年がいたりする。

「おい康平。奢^さってやろうか」

三十くらいのごつい男が、折り畳み式の椅子を引き寄せて煙草を吸いはじめた康平に言った。康平は黙ってハイライトの袋をさしだす。男は人の好きそうな笑顔で一本抜きとって啜^{すす}えた。

「今晚上野で友達に会うんだ。餓鬼の頃からの友達でよ、お前さえよかったら一緒に来ないか。いい奴だぜ。気にすることはないんだ。ただそいつ、遊び人だよ。金廻りもいい奴なんだ。東日本橋のほうで靴屋^{くつや}をやっているのさ。不景気なつらばかりしてないでたまには付き合え。そいつがよ、キャバレーに行こうって言うんだ。なに、そんな高くはないさ。俺だって金がねえもんな。だから誘われたと

きちゃんと訊^きいたんだ。五千円もあればお前、お釣りが来るってさ」

「俺、いいよ」

康平は煙草の火を貸してやりながら言った。

「なんでえ、行かねえのか」

「うん」

「うちへ帰ってまた本でも読もうって言うんだろう。しょうがねえなあ、お前はちっとじじむさいよ」

「悪いけど……」

「そうか、じゃあまた今度な。でも、お前って変ってるなあ。全然遊ばねえみてえじゃねえか。いたいお前は何か一番好きなんだ」

すると、入口の水道で手足を洗って来た男が、濡れたタオルで顔を拭^{ぬぐ}いながら、
「まさか仕事に興味ってわけじゃねえだろうな」

と大声で言った。十五人ほどの仲間が声をたてて笑う。

「そんなことはねえよなあ、舐^舐めるのはいつも一番先だもの」

「彼女がいるんだよ、彼女が。判^わってやれよ、若いんだからさ」

いつも同じ調子だった。みんなという時彼らが表面に泛^{うか}ばせているのは、気が好くて、陽気で、冗談好きな顔である。適当に豊かでさえあれば、その顔はどこまで掘りさげても同じ顔であるのかも知れない。だが、バスや電車の中で人に押し揉^もまれていた時の一人きりの顔は、悲しげで依^い怙^こ地で、どこか怯^{おそ}えているようでさえあるのだ。

この辺りは葛飾区の北端に近い。昔の利根川の名残りだという小合溜こあいだめはすぐそこで、その向こう岸は埼玉県になる。最寄りの駅である国電金町駅のあたりには大きな団地ができてすっかり昔とは様子が變つてしまつたが、水元みづもとと呼ばれるその界限かいげんでも、特に高須木工所のある辺りは、二十年ほど前と余り變つてはいなかつた。

康平はジーパンをはき、薄い化繊のジャンパーを着ると事務所のわきに突き出した、青い塩ビひんの庇ひさしの下にあるタイムレコーダーに自分のカードを突っ込んでガシャンと鳴らし、カードをケースに戻すと門を出た。すぐに茶色いサングラスをかける。もう日が暮れかけていたが、康平は夜でも外を歩くときはサングラスをかけるのだった。

人に目を見られるのが億劫おつうだった。ことに着飾つた若い女と目が合い、それが自分のタイプだと思つたりすると、余計億劫な氣がするのだった。

古い靴は歩くとびポコポコと音をたてた。ジャンパーのポケットに両手を突っ込み、家まで歩いて帰るのである。バスの停留所が四つほどの距離であつた。

康平は減多にバスに乗らない。会社がバスの定期はくれるのだが、持ち歩くことさえしなかつた。うつむいて、そう急いでいるようには見えない歩きかただが、その実かなり大股で早く、彼を追いついて行く者はそう多くなかつた。彼はバス通りをさけて近道へ入る。

「ええ、安いよっ」

狭い道の両脇に、八百屋や魚屋が並んでいて、威勢よくというよりはやけくそのような声が響いていた。キャベツの葉が泥にまみれて人に踏まれており、鮫さえたような漬物の匂いがした。うしろのほうをパトカーのサイレンが右から左のほうへ移動して遠のいて行つた。乳母車と乳母車の間をすり

抜け、康平はむつつりとその商店街を通りすぎて行った。はやばやとライトをつけた自転車にのった子供が、よたよたしたこぎかたで康平を追い抜いて行く。そんな狭い道にも、赤く塗ったコカコーラの車がり入れて来ていて、道を塞いでいた。ガシャンと、瓶の鳴る音がする。康平はその先にある煙草の自動販売機の前で立ちどまると、百円玉をいれてハイライトのボタンを押した。いま彼が持っている金は、その百円玉一枚だけであつた。それがお釣りの十円玉にかわり、康平は煙草と十円玉をジャンパーのポケットへ落とし込むと、またむつつりと歩きはじめた。

彼の家は細い路地の中程にあつた。上下合わせて四部屋の家で、両どりの家とは壁でつながっていた。つまり長屋である。それもひどく古い。それでも両親が苦勞して自分のものにした家なのだ。「……ま」

ただいま、の「ま」だけしか聞きとれない声で玄関のガラス格子ごうしをあけてボロ靴をぬぐと、下駄箱の横に置いてある雑巾で足を拭いた。靴下を履いていないのだ。

一階には人の気配がなかった。康平は茶の間を通り抜けて台所へ出ると、便所のドアの前にある階段を登って暗い二階の北側の四畳半の襖ふすまをあけた。敷きっぱなしの蒲団ふとんを踏んで電灯をつける。四角い部屋の三方の鴨居かもいの上に棚が作っており、本や雑誌がぎっしりと積み重ねてあつた。

「康平、帰ったのかい」

裏の戸があく音がして、母親の声が聞こえた。

「ああ」

康平は蒲団の上に仰向けあおむけにひっくり返って答えた。ジャンパーのポケットを探つてハイライトをとりに出し、枕もとへ抛なり出す。

「お父さんは清子のうちへ行ったよ」

母親の聲に康平は眉をひそめる。彼は二十七で、妹の清子はことし二十五。この春嫁いで花畑町に住んでいる。そこは足立区で、乗り物を使うとひどく遠まわりになるが、直線距離にすればさほど遠くない。

「そうちょいちょい新婚のところへ行つてどうする気だい」

低い声でつぶやいている。父親はこのところめつきり老いが目立ち、やたらと人恋しがるようになっている。

長男の純一は水産会社に勤めていて、一年のうち数カ月しか日本にいない。遠洋漁業の母船要員なのである。収入は比較的よく、一家の生計のほとんどは純一の仕送りでまかなわれている。

と言っても、康平は親がかりをきめこんでいるわけでもない。給料袋は毎月手つかずで母親に渡ししている。單車もステレオも身のまわりのおしゃれにも、まるで関心がないようだった。

「そのうちお前の貯金もはじめなければねえ」

母親がいつかしみじみとそう言った。結婚資金のことを言ったのだろう。

「金なんか要らないよ。みんな使っちゃいな」

その時康平はそう答えた。母親はギョツとしたように彼を見たが、康平は別になげやりな様子でもなかった。

「おたくの子供はみんなよくできてるもの」

近所の主婦が茶飲みばなしによくそう言つて母親を羨ましがっている。

「康ちゃんだって真面目一方だしさ。それに、こう言っちゃ悪いけど、両親に似ずいい男だよ。それなのに、彼女だってまだいないんだらう。ねえあんた、ほんとにあのご亭主の子供なんだらうね」
そんなあけすけな冗談が出るほど、康平は父にも母にも似ていなかった。きちんとした恰好かっこうをさせ

れば、相当の美男子なのである。いや、優^{やさ}さ男と言うべきだろう。遅^{おく}しさはないが、繊細な感じで、身のこなしもどうかするとひどく優雅に見えることがあった。

「まだ欲がないのよ、あの子は」

康平の話が出るたびに、母親はそう言っている。たしかに、その年頃の男ならあれこれ欲しいものだらけで、給料を家に入れるどころか、もらったとたんにはパッと使い果してしまっても不思議はないのである。

襖^{ふすま}があいて母親が顔をのぞかせた。

「康平、今度のお休みにちょっとたのまれてくれないかい」

「何を」

康平は天井を向いたまま問い返した。

「お兄ちゃんの会社へ持って行って欲しい物があるんだよ」

「またか」

「嫌ならいいんだけどさ」

「いいよ、行ってやるよ。何を持って行くんだい」

「手紙だよ」

その水産会社では、遠洋漁業に出ている社員に対する家族からの手紙や小荷物は、本社ですべて処理してくれる仕組になっていた。地方にいる家族は本社の係りあて郵送すればよかったし、近い者は直接届けてもよかった。しかも、日、祭日にしか外出できない者の便宜も考えて、本社が休みの日も守衛室で受付けてくれることになっている。

「手紙か」

「そう。あのね、お兄ちゃんにどうかと思う人がいるんだよ」

「嫁さんかい」

康平はむっくりと体を起した。

「そう」

「見合写真か」

「そうなんだよ。帰って来てもいいんだけどさ、向こうでゆっくり眺めててくれたほうが、考
えもよくまとまると思うしね」

「見せてよ」

「お兄ちゃんのお嫁さんだよ」

「いいじゃないか、ねえ、見せて」

康平は立ちあがって襖をいっばいにあけた。

「下にあるよ」

母親は階段をおり、康平があとに続いた。

「どうだろう」

茶箆^{ちやなんす}笥^{ひきだし}の抽斗^{ひきだし}から、母親は二ツ折の台紙にはさんだ写真を出して康平に渡した。

「ふうん」

康平がひろげて眺^{なが}めた。

「よさそうな人だろ」

「うん」

「お兄ちゃんにはそういう人がいいと思うんだよ」